

谷内21号墳



1992・3

小矢部市教育委員会

目 次

はじめに.....	1
I 調査経過.....	2
II 古墳の位置と環境.....	3
III 墳丘・埋葬施設.....	3
IV 出土遺物.....	5
おわりに.....	16
English Summary	

例 言

- 1 本書は富山県小矢部市埴生字谷内12-11番地所在の谷内21号墳の発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は国庫補助事業として、国及び富山県の補助金を得て、小矢部市教育委員会が実施した。
- 3 調査は伊藤隆三（小矢部市教育委員会社会教育課文化財係長）と塚田一成（同主事）が担当した。
- 4 現地調査は平成3(1991)年7月18日から平成4(1992)年3月7日に終了した。
- 5 遺物の切り取り及び搬出作業は、跡元興寺文化財研究所の協力を得て、3月9・10・19・20の4日間に亘って実施した。
- 6 本書の編集は伊藤が行った。
- 7 調査にあたって、都出比呂志（大阪大学文学部教授）、和田晴吾（立命館大学文学部教授）、井上和人（文化庁記念物課文化財調査官）、水嶋正春（国立歴史民俗博物館助教授）、中司照世（福井県教育局埋蔵文化財調査センター主任文化財調査員）、田中新史の各氏のはか多数の方々のご指導を賜わった。記して謝意を表したい。
- 8 遺物は一括して小矢部市教育委員会が保管している。

はじめに

小矢部市埴生地区は、近世北陸街道の越中では最も西に位置する宿場町として栄えました。西には加越国境をなし、俱利伽羅古戦場として夙に知られる砺波山丘陵を擁しております。この丘陵地を中心といたしまして数多くの古墳が分布しております。また、山麓にはその当時の集落跡も知られており、小矢部市では最も古い歴史を有する地域のひとつであります。

この度、宅地造成事業に伴いまして谷内21号墳の発掘調査を実施いたしましたところ、富山県では初めて当時の武具類が数多く出土し大きな反響を呼びました。副葬品の遺存状況は極めて良好で、の中には革製の盾や草摺など全国的に見ても出土例の少いものも含まれています。調査は8ヶ月に及ぶ長期なものとなり、去る3月7日に終了いたしました。今後はこれらの出土品を更に詳細に調査し、古墳時代の研究に幾何かでも寄与できますよう努力してまいりたいと考えております。関係各位には今後共ご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

調査にあたりまして、大阪大学文学部教授都出比呂志先生、立命館大学文学部教授和田晴吾先生、文化庁記念物課文化財調査官井上和人先生、国立歴史民俗博物館助教授永嶋正春先生をはじめとする方々のご指導を賜りました。また、調査中全国各地から遠路数多くの研究者の方々が米跡され有益なご教示を頂きました。厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、土地所有者の上田武作氏をはじめご家族の皆様及び地元埴生地区の皆様方には、終始暖かいご協力を賜りました。衷心より厚く御礼申し上げます。

平成4年3月31日

小矢部市教育委員会
教育長 岩峯 敬正

I 調査経過

小矢部市埴生地区は石動市街地西南部に隣接しており、これまでも小規模ながら宅地造成などが繰返されてきた。JR北陸線から埴生町街地までの間の丘陵裾部は殆んど開発し尽くされた感がある。開発初期の頃には、数基の古墳が未調査のまま破壊されたとも言わされている。近年、丘陵奥地に達する「埴生開発道路」が建設されてからは、この道路添いで再び小規模な開発が活発化している。谷内古墳群はこの丘陵の中にある。

谷内21号墳が所在する丘陵部一帯の造成計画が、地元開発業者から市教育委員会へ最初にもたらされたのは1989年である。協議を受けた市教育委員会は現地を確認の上、古墳の所在する部分を造成計画地域から除外するよう申し入れをし、一旦は了解を得られた。しかしその後、土地所有者個人名で再度造成が計画されたため、1990年墳丘測量と試掘調査を実施した。調査の結果、当古墳が直径が約30mの当地域では最大級の円墳であることが明らかとなった。墳頂部東南の表土直下から

日誌抄	
1991年	
7月18日	調査開始。保存用山砂除去。
7月25日	墓址検出作業開始。
10月10日	埋葬施設上にビニールハウス設置。
10月14日	棺内調査開始。1号短甲出土。
10月15日	韓国国立全州博物館倉柄夏氏ほか来跡。
10月21日	田中新史氏来跡。
10月31日	富山県教育委員会文化課桃野真亮主幹視察。
11月2日	福井県教育厅埋蔵文化財調査センター中司照世氏、穴澤啄光氏ほか来跡。
11月5日	大阪大学文学部教授都出比呂志氏、立命館大学文学部教授和田晴吾氏来跡。
11月11日	大家啓一小矢部市長視察。
11月14日	文化庁記念物課井上と人文文化財調査官、富山県埋蔵文化財センター邑本順亮所長視察。
11月25日	小矢部市教育委員視察。
11月28日	遺物実測開始。
12月5日	国立歴史民俗博物館助教授永島正春氏来跡。
12月7日	石川県立埋蔵文化財センター所長橋本證夫氏来跡。
12月28日	強風のためビニールハウス大破。応急処置。
1992年	
1月6日	作業再開。
1月8日	ビニールハウス復旧。
1月9日	報道発表。
1月11日	現地公開説明会(~12日)。参加者約1,200名。
1月24日	遺物取り上げ作業開始。
2月27日	軽製品の取り上げ完了。
3月7日	調査終了。
3月9日	遺物切り取り作業開始。草摺・整備、矢柄搬出(~10日)。
3月19日	盾搬出(~20日)。

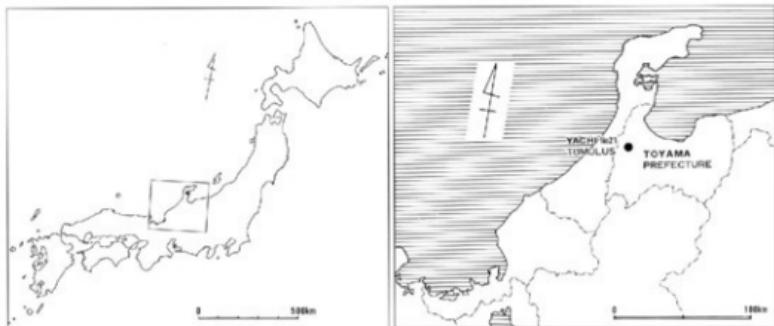


図1 谷内21号墳の位置

は、管玉2、小玉約80、七師器片が採取され、さらに墳丘中央部付近で断面がU字形をなす木棺直葬の埋葬施設が少くとも2基存在することが確認された。このうち北側に位置する埋葬施設で鉄剣2口を検出したが、取り上げは見合せ、表面に保護剤を塗布した後、山砂で埋め戻し調査を終了した。

調査の結果を直ちに土地所有者に報告し、計画の変更をお願いしたが、この時点では変更の承諾は頂けなかった。その後、この間の経緯を県教育委員会に報告し協議した結果、1991年度に国庫補助事業として発掘調査を実施し、その結果を見て今後の取り扱いを検討することとなった。調査は1991年7月18日に開始し、翌1992年3月7日に終了した。その後3月9・10日に勧元興寺文化財研究所の協力を得て遺物の切り取り作業を行い、20日までに現場からの撤出作業を完了した。その間1月11・12日には現地の公開説明会を開催し約1,200名の参加者を得た。

II 古墳の位置と環境

小矢部市は富山県最西部に位置し、俱利伽羅古戦場として知られる砺波山丘陵を介して石川県と境を接する。旧砺波郡の西北部域にあたる。古墳の所在する埴生地区は市の中西部域にあたり、西部砺波山丘陵とその山麓地域とからなる。小矢部川左岸の比較的地形の安定した地域である。旧市街地の中央部には源義仲の威勝祈願を伝える護國八幡宮が鎮座する。また、藩政期には宿場町として栄え、旧北陸街道添いは今も往時の面影を残している。

古墳は丘陵部を中心に40基余りが分布しており、砺波地域では分布密度が最も高い。古墳群は前方後円墳3基、直径あるいは一辺が25~30mの中規模の円墳あるいは方墳が6基、その他20m以下の小規模な古墳によって構成される。このうち築造時期が明らかなものは、谷内16号墳(全長約47mの前方後円墳・古府クルビ新期)、閔野1号墳(推定全長65mの前方後円墳・高昌期)、閔野2号墳(直径約30mの円墳・5世紀中葉)、若宮古墳(全長約50mの前方後円墳・TK47型式、埴輪V期)である。

谷内古墳群はこのうちの23基よりなり、その構成は前方後円墳1基(16号墳)、中規模墳2基(2号墳・21号墳)、小規模墳20基である。谷内21号墳は古墳群南西部の標高約72mの尾根先端部に立地する。谷部水田との比高は約15mである。ここから谷内16号墳へは西へ約550m、閔野1号墳・閔野2号墳へは南西へ約1,100m、若宮古墳へは南東へ約400mである。また、丘陵西方約800mの平野部には北反戦遺跡(5~6世紀代)、南東約2,000mには道林寺遺跡(5~6世紀代)、南東約2,500mには竹倉島遺跡(4~6世紀代)がある。

III 墳丘・埋葬施設

〈墳丘〉

古墳は南東方向に延びる丘陵尾根先端部に立地する。墳丘はこの尾根を切断した後、南東方

向(平野側)に主に盛土をし築造されている。墳丘西側はやや崩れているため明らかではないが、殆んどが地山の削り出しによっているものと思われる。墳丘裾には地山の削り出しによる幅30~40cm程度の平坦面が巡っているが、外表からはその位置を特定しにくい。段築、葺石、埴輪などの外表施設は認められない。盛土は墳丘中位から上に施される。その方法は、まず暗褐色土と黄褐色土を順次積み重ね断面形が三角形を呈する堤防を巡らせ、その後内側にやや良質の黄褐色粘質土を充填し完成させるものである。盛土第1層と旧表土との間には薄い灰層が、トレンチによる切断地点すべてで認められ、盛土に先立って山焼が行われたことを窺わせる。墳丘の直径は約30m、高さ約3mである。

〈埋葬施設〉

埋葬施設はこれまでのところ2基確認されており、今回発掘調査を実施したのは北側のほぼ墳丘中央部に位置するものである。横断面形がU字形を呈する木棺の直葬で、2段からなる墓塚を有し、方向はほぼ東西である。墓塚は東側から南東側にかけて一部盛土にかかる以外は、殆んど地山を掘り込んでいる。その規模は南北約3.7m、東西方向は西側の墳丘が崩れているた

め明らかではないが、木棺の位置などから12~13m程度であったと思われる。木棺の堀り方は全長約9.9m、幅約0.8mの狭長なものであるが、西側墳丘の崩れにより掘り方西端の上部が削り取られていることを考慮に入れればさらに若干長くなる。幅の差はあまりなく、東西の比高差も東側が数センチメートル高い程度で顕著ではない。木棺底面も同程度のレベル差であったものと考えられる。また、棺底部中央付近にのみ粘土の使用が認められるが、その厚さなどは今回の調査では確認していない。



図2 谷内21号墳周辺の主な遺跡（古墳時代）

IV 出 土 遺 物

埋葬施設は盜掘などを受けておらず遺物はほぼ現位置を留めていた。また、墓坑が比較的深かったためその遺存状況は良好であった。以下遺物の出土状況について説明を加えるが、遺物の点数などは今後の整理作業により若干変わる可能性がある。

まず、棺の中央部に鉄劍 2 口が並列して置かれており、この中間が遺体の位置と思われる。鉄劍の切先は何れも西向きで、東頭位に葬られたものと考えられる。この周辺にのみ赤色顔料が認められる。棺東部には黒漆塗りの革盾が 1 面頂部を東に向かって置かれている（棺上）。東西約 110cm、南北約 60cm の範囲に表裏に塗られた漆膜が残っているが、頂部の多くは失われておりその全長は不明である。他の遺物と比較して遺存状況は必ずしも良くないが、綾杉文帯、鎧歎文などの刺し縫いの痕跡が観察される。棺西部には黒漆塗りの長方板革綴短甲（2 号短甲）が 1 頭、前胸を棺底に付け西向きに倒して置かれ、さらにその西に接するように矢 1 束 20 本が鉄鏃を西へ向け置かれている。この矢柄の桿部分と筈巻部分には黒漆が塗られており、その全長が約 72 cm と推定できる。頭位にあたる棺中央部やや東寄りには、黒漆塗りの三角板革綴短甲（1 号短甲） 1 頭とこれに付属する頭甲、肩甲（片側 8 枚構成）、黒漆塗りの革草摺のほか、矢 1 束 40 本、鉄刀 1 口、黒漆塗りの豎櫛約 40 点がある。その配列は、北向きに正立して置かれた三角板革綴短甲を中心西に豎櫛、東に草摺とその上に矢が鉄鏃を西方に向け置かれ、南に鉄刀が刃部を南に、切先を東に向け置かれている。頭甲と肩甲は本来短甲の両肩部に乗せられていたようであるが、右肩部は矢・草摺の上に、左肩部は豎櫛の上に落下している。このうち草摺は三角板革綴短甲と同じく北向きに正立して置かれていたようであるが、上から押し潰され東西約 60cm、南北約 40cm の楕円形の漆膜として残っており、ほぼその全容を知りうる。全面に長軸 1.7cm、短軸 0.7 cm 程度の細かな菱文が刺し縫いされている。

〈出土遺物の種類〉

[中央部埋葬施設]	武 具	三角板革綴短甲（1 号短甲）	1
		長方板革綴短甲（2 号短甲）	1
	頭甲		1
	肩甲		16
	革草摺		1
	革盾		1 (棺上)
武 器	鉄刀		1
	鉄劍		2
	鉄鏃（1 号鉄鏃）	1 束	40 矢柄 4 以上
	鉄鏃（2 号鉄鏃）	1 束	20 矢柄 10 以上

装身具	竖椭	約40
【填 丘 上】	石製品 管玉 (緑色凝灰岩製)	2
	小玉 (滑石製)	約80
土 器 土師器片 (壺・高杯など)		



図3 谷内21号墳からの遠望



図4 木棺跡検出状況 (西から)



図6 盛 土 (南東部)



図5 墓塚の土層 (北西から)



図7 埋葬施設の全景(東から)



図8 埋葬施設の全景(西から)

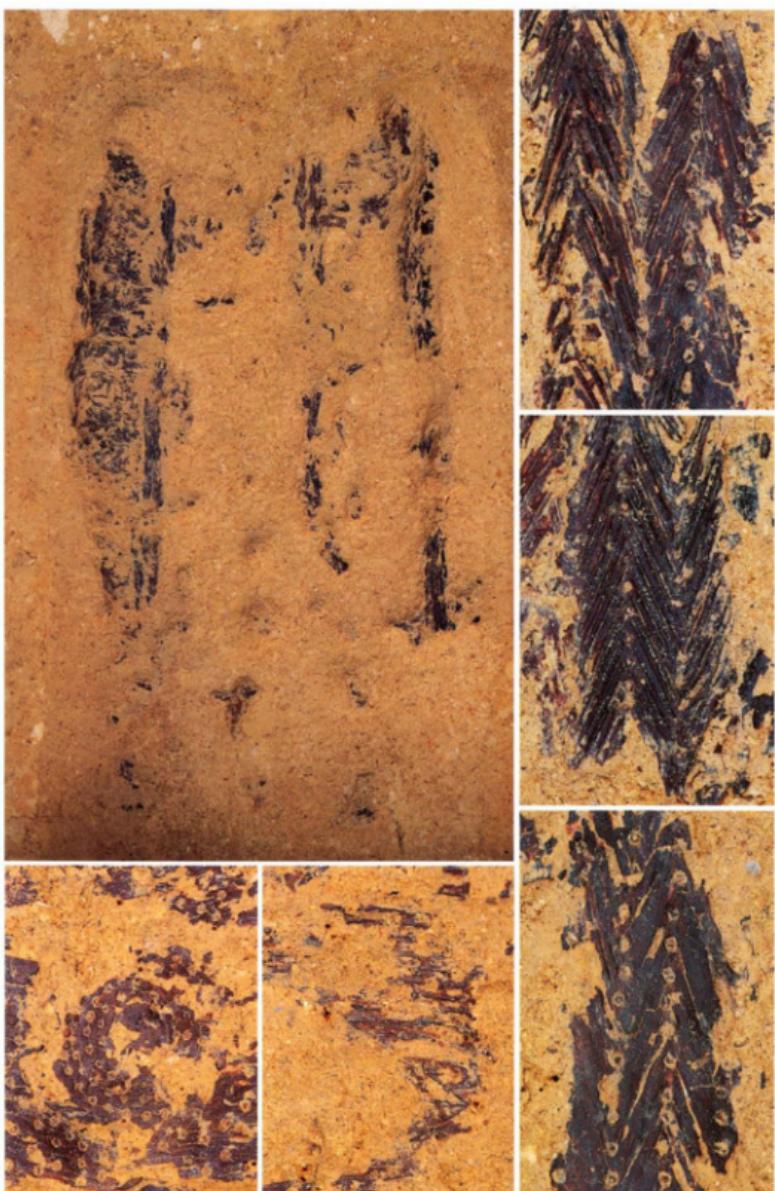


図9 盾全景(西から)・細部



図10 棺内頭部付近の遺物(西から)



図11 棺内頭部付近の遺物(東から)



図12 武具・武器細部

図13 三角板革綴短甲(1号)細部

図14 矢(1号)全景・細部

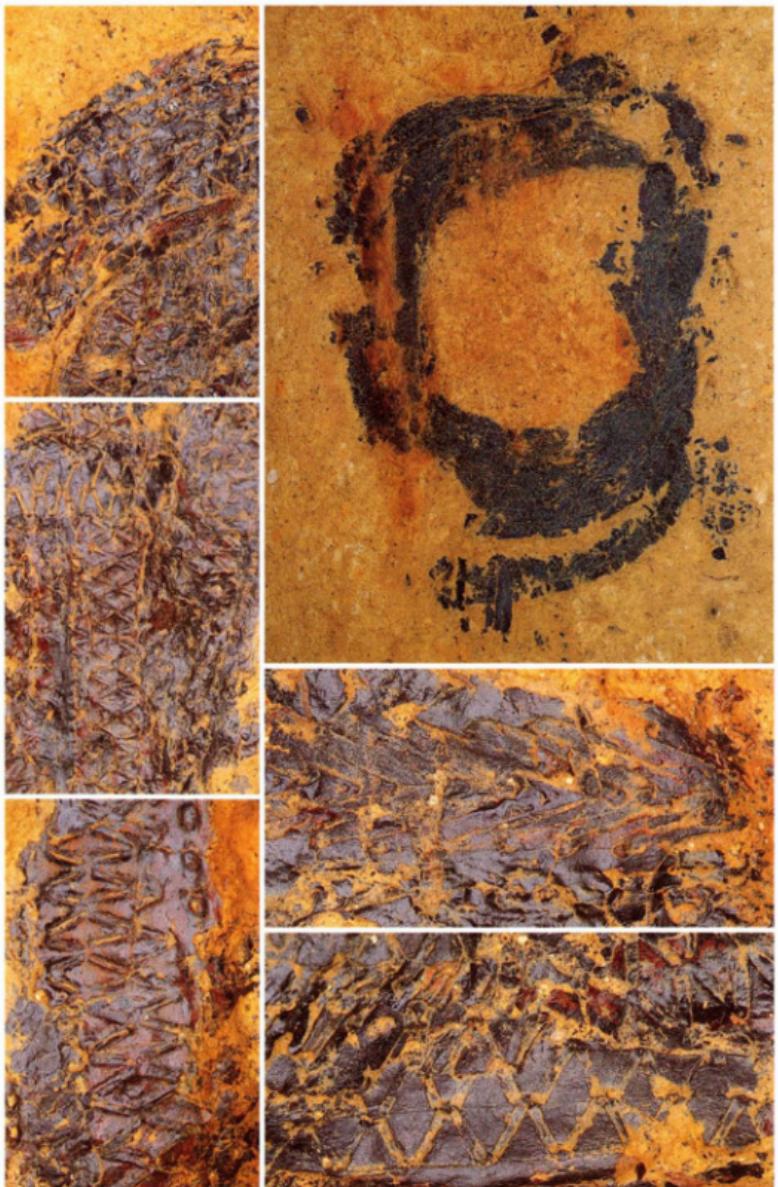


図15 草摺全景(東から)・細部



図17 棺中央部付近（西から）



図16 縦欄全景（西から）・細部



図18 長方板革鎧短甲(2号)・矢(2号)全景(西から)



図19 長方板革縦短甲と矢・短甲前胸(東から)



図20 鉄鎌(2号)(東から)



図21 矢柄(2号)細部

おわりに

谷内21号墳の今回の発掘調査で明らかとなった主な点を要約する。

1. 谷内21号墳は直径約30mの円墳である。
2. 埋葬施設は少くとも2基ある。今回発掘調査を実施した中央部埋葬施設は断面形がU字形を呈する木棺の直葬で、方位はほぼ東西である。棺の掘り方は長さが約9.9m、幅が約0.8mの狭長なものである。
遺体の位置と考えられる棺中央部には剣2口が並列して置かれており、その切先の向きから頭位は東向きと推定できる。
3. 出土遺物は短甲2領、頸甲、肩甲、革草摺、革盾の武具、鉄刀1口、鉄剣2口、矢2束60本の武器のほか堅櫛約40点などである。

このうち、三角板革綴短甲は後胴豎上第2段(地板)に小形三角板を使用した、類例の少ないものである可能性がある。矢は2束検出されたが、いずれも矢柄の一部に漆が塗られており全長が約72cmと推定できる。矢の全長が推定しうる例は全国的に見ても極めて少ない。革盾は北陸では今のところ数例しか出土例がない。革草摺の出土は北陸では福井市天神山7号墳に次ぐものであるが、今回のようにその全形が知りうる状態で出土した例は全国的にも希であり、その復原的研究にとって貴重な資料となる。

4. 三角板革綴短甲と長方板革綴短甲が同一の埋葬施設から出土したのは北陸では今回が初めてである。短甲の編年的研究に資するところが大きい。
5. 副葬品の配列は整然としており、配列に当って何らかの約束事が存在したことを感じさせる。ことに、棺西方に置かれた長方板革綴短甲と平根式の鉄鎌を主とする矢の組合せは、頭位に配された三角板革綴短甲と細根式の鉄鎌による矢の組合せと比較すれば、何れもやや古い型式の武具・武器の組み合わせとなっている。その配置の意味には興味深いものがある。
6. 以上、主な出土遺物から古墳の築造時期は5世紀前葉と考えられる。副葬品は堅櫛を除けばすべて武器・武具で占められ、被葬者の武人的性格を窺い知ることができる。



図22 調査中の谷内21号墳(北から)

古墳の所在する地域は北陸道越中西部域における、軍事・交通上重要な位置にある。古代には越の三閥のひとつである砺波関がこの地域に設置されたとも考えられており、中世にあっては源平俱利伽羅合戦の戦場となった地域である。古墳時代にあっても同様な意味をもつ重要な地域であった蓋然性は、今回の調査によってより高くなったものと考える。

〈English Summary〉

Yachi No.21 Tumulus;an ancient burial mound in Oyabe City, Toyama Prefecture, Japan

Yachi No.21 Tumulus is located on the Tonamiyama Hill in the western Toyama Prefecture, Japan. This region is a very important point of the traffic and military affairs in *Hokuriku* Road, from the ancient time.

The excavation was carried out from July 18, 1991. This Tumulus is a circular mound of some 30 meters in diameter, and the coffin is situated in the center of the mound. Shield of lacquered leather, lacquered iron cuirasses, iron neck armour, iron shoulder armour, tassels of lacquered leather, iron swords, iron arrow-heads and lacquered arrow-sticks, and combs of lacquered bamboo work were discovered in the coffin. These funerary offerings have been kept in good conditions.

Yachi No.21 Tumulus dated to the early 5th century A.D. in middle *Kofun* period. The buried person reminds the top of the military man in this region. And now we can establish the chronology of burial mounds in Oyabe, Yachi No.16 Tumulus → Sekino No.1 Tumulus → Yachi No.21 Tumulus → Sekino No.2 Tumulus → Wakamiya Tumulus.

We have to analyse these artifacts and compare with other data, from this time.

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第35冊

谷内21号墳

発行日 1992年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

(〒932 富山県小矢部市本町1番1号)

TEL (0766)67-1760

印 刷 株式会社 アヤト

YACHI No.21 TUMULUS

The Excavation of an Ancient Burial Mound
in Toyama Prefecture, Japan



March 1992

The Board of Education of Oyabe City

Toyama, Japan